

海とともに未来を見据える

気仙沼く南三陸

東北
DECADE

復興レポート

防潮堤の見本市

あの未曾有の大災害から一〇年が経とうとしている。建設業界が総力を挙げて復旧・復興に挑んできた東北の今を三回にわたってレポートする。初回は宮城県の気仙沼市から南三陸町を訪ねた。

現在、気仙沼で最も目を引くのは気仙沼湾横断橋の雄姿だ。二〇二〇年度末に開通予定の気仙沼道路の気仙沼港ICと唐桑南ICを結ぶ。橋長一、三四四以(陸上部含む)、

逆Y字型の主塔二本を擁する斜張橋だ。取材時(二〇二〇年十一月中旬)には仮設物も撤去され、その全容を体感することができた。海面から一〇〇以を超える空中回廊を疾駆することを思うと胸が高鳴る。

気仙沼の海の玄関とも言える気仙沼漁港では朝六時から水揚げの様子を見学することができる。この日もブリやタコなど様々な魚類を囲んだ仲買人たちの勇壮な声が場内に響いていた。気仙沼では震災で七〇以前後の地盤沈下が観測されたため、この漁港区でも嵩上げ工事が行われたが、その後四〇以ほど隆起した。小型船は平台や梯子を設置して水揚げ作業をしているという。

それでも漁港には活気が満ちている。威勢のいい演歌のBGMが流れるなか、大型のマグロ船の出船送り

が開かれていた。「船長は気仙沼の憧れの的。かつての出船送りは船員の家族だけで行われるひっそりとしたものでしたが、最近の関係者や観光客が賑やかに旗を振るようになりました」と教えてくれたのは気仙沼観光推進機構認定観光ガイドの今川悟さんだ。元新聞記者の今川さんは気仙沼の復興を市民目線で見届けたいと新聞社を退職、現在は市議会議員として幅広い活動を行っている。

気仙沼では「防潮堤のデパート」と言われるほど多様な形式の防潮堤が築造された。建物の下に隠された防潮堤、発災時のみ起き上がるフラップゲートなどだ。その背景には地域に暮らす市民の意向を最大限に尊重する市の姿勢があった。「一八〇を超える地区で何百回と説明会や検討会が開かれました。合意形成への道筋は遠くて、めげそうになることもありましたが、市民ファーストの視点で防潮堤を整備することができました。大きな成果だと思います」。今川さんは、建設業界や市の職員らの尽力はなかなか市民には届きにくいけれどと笑いながら、そう話してくれた。



気仙沼湾横断橋

出港を待つ
遠洋マグロ船

エネルギーの源 気仙沼漁港

津波と地盤沈下のダブルパンチにも怯むことなく復興を遂げた気仙沼漁港。東北地方を代表する漁業拠点だ。世界三大漁場の一つである三陸沖から旬の魚介類が水揚げされる。隣接する観光物産施設「海の市」には名物のマンボウやサメをはじめ、この地ならではの食材を求めて、日々多くの観光客や地元市民が訪れている。



新しい気仙沼の「顔」

かつて気仙沼の顔であった市街地「内湾地区」に、ウォーターフロント商業施設「迎（ムカエル）」、公共公益施設「創（ウマレル）」、スローストリート「結（ユワエル）」、「気仙沼アムウェイハウス 拓（ヒラケル）」が生まれ、人気を集めている。「迎」にはカフェやレストランがテナントとして入居、「創」には移住・定住センターやまちづくり大学などの機能を集約した。建物の下部には防潮堤が隠されている。周辺ではいまだ道路や広場の整備が進む。広場ではマルシェの開催などイベントの構想もある。



海辺の新しいまちに暮らす

高台には宅地や道路、集会場などのインフラが整備され、高台への防災集団移転により新しいコミュニティが生まれつつある。気仙沼市の防災集団移転は46団地907区画に及ぶが、漁師や農家にとっての立地条件を満たしているとは言い難い。住宅再建エリアの活性化も今後の課題になると今川さんは話す。内湾地区ではフラップゲート式の防潮堤や道路をはじめとするインフラの整備が佳境を迎えている。



2014



2020

生まれ変わる南三陸

南三陸町の水戸辺川の河口部の更地には静かな田園風景が広がる。かつてこの場所では昼夜を問わず災害廃棄物を焼却処理する3基の焼却炉をはじめ、何棟もの処理施設が立ち並んでいた。約6万tもの廃棄物が処理され、そのほとんどが復興事業の資材として供された。近くには2020年に全面開園となった「南三陸町震災復興祈念公園」がある。ゆっくりと流れる時間のなか、犠牲者名簿を安置した「祈りの丘」をはじめとする追悼と伝承の祈念施設がまちの未来を見つめ続けている。



七年近い時を経て同じ場所に立つ。そこには収穫を終えた田んぼが次の田植えを待っていた。静かに勇気が湧いてくる風景だった。

本誌が以前南三陸を訪れたのは二〇一四年初頭、災害廃棄物処理業務の現場だった。同年三月号にその記事がある。焼却施設を撤去した後の造成工事。一面に盛土された平地が漠々と広がっていた。将来は農地として活用されることだった。取材に応じてくれた所長が少し疲れた表情で、周辺住民の工事への理解、協力を感謝しながら、その期待に応えたいと力強く話してくれたことを覚えている。

農地に生まれ変わった海辺の更地

家族全員を震災で亡くした女子高校生が翌年の追悼式典で、それでも海が好きだと、海とともに生きていくと、そうメッセージを送ったという。その言葉が市民の心にどう響いたか、どれだけ大きな勇気呼び起こしたか想像に難くない。気仙沼はまだまだ大きな可能性を秘めている。



気仙沼観光推進機構認定観光ガイドの今川さん



気仙沼市 東日本大震災遺構・伝承館

2019年3月に開館した「気仙沼市 東日本大震災遺構・伝承館」。元々、宮城県気仙沼向洋高校の校舎で、現在は伝承館から被災した旧校舎を巡る見学コースが設定されている。津波で3階にまで運ばれてきた車が当時のままの姿で残されている。館内で最初に観る13分のビデオやこうした目に見える震災の証拠には無用の演出がない。その分、津波の容赦ない力がリアルに伝わってくる。



「この一〇年、まちには大きな希望が生まれています。震災前にはなかった都会的な施設もできました。一方で、こうした施設をいかに有効活用していくか、そのランニングコストなどが課題になりつつあります」と今川さんは表情を引き締める。人口は減少傾向が続く、商業施設にはいまだ空きもある。それでも気仙沼の未来をこう見据えている。「まちづくりのゴールは見えてきませんが、その先にもう一周、二周と走路は残っています。ハードルを越える楽しさ、やりがいも確かにあるんです」。その先にゴールはないのかもしれない。「企業からの研修でまちを訪れる皆さんも復興のお手伝い、支援という感覚ではなくなってきました。復興のプロセス、コミュニティにおける合意形成のあり方など、被災地に学ぶという眼差しのほうが強くなってきたように思います」。気仙沼には人口減少、高齢化といった日本の縮図がある。この地の取組みが全国に広がれば嬉しいと今川さんは

二周目、三周目と続く復興への道